

# 2019 年度卒業研究評価の分析結果報告

2020 年 4 月 20 日 分析・文責：木村堅一

目 的：

学士課程における学習成果の達成度の評価を行い、教育課程の課題や改善点明らかにするため、全学共通のルーブリックに基づき、2019 年度に提出された卒業研究に対する評価とその分析を行う。

方 法：

国際学群、スポーツ健康学科、看護学科の卒業研究評価担当教員の協力の下、2019 年度卒業研究論文に対する全学共通のルーブリック評価に関するデータ収集・分析を行った。

用いたルーブリック評価の項目は表 1 の通りであった。

表 1 全学共通の卒業研究論文評価ルーブリック

	評価の観点	S	A	B	C	D
1	卒業研究に取り組む態度	指導教員と随時相談しながら、自主的かつ計画的に卒業研究に取り組み、期限内に課題を提出した。	指導教員と相談しながら、自主的に取り組んだ。期限内に課題を提出したが、計画性に少し問題があった。	指導教員と相談していたが、自主性・計画性が少し欠けていた。またいくつかの課題の締め切りが遅れた。	指導教員との相談も最低限で、自主性・計画性が欠けていた。また、多くの課題の締め切りが遅れて提出した。	指導教員に対する相談・連絡もほとんどなく、期限内に完成論文が提出できなかった。
2	構成	論文の構成（序論・本論・結論または緒言・方法・結果・考察・結論）が正しくできている。	論文の構成（序論・本論・結論または緒言・方法・結果・考察・結論）がほぼ正しくできている。	論文の構成（序論・本論・結論または緒言・方法・結果・考察・結論）の誤りが1-2カ所ある。	論文の構成（序論・本論・結論または緒言・方法・結果・考察・結論）の誤りが3カ所以上	論文の構成（序論・本論・結論または緒言・方法・結果・考察・結論）が出来ていない。
3	引用	1. 文献の引用方法が正しい。 2. 文献リストが統一して作成されている。 3. 自分の文章と他人の文章との違いが明確である。	3 つのうち 2 つは出来ているが、1 つの項目の誤りが少し (1-3カ所) ある。	3 つのうち 1 つは出来ているが、2 つの項目の誤りがそれぞれ少し (1-3カ所) ある。	全ての項目において誤りがあり、その数がそれぞれ1-5カ所ある。	全ての項目において、誤りが6カ所以上ある。
4	批判的・論理的思考	先行研究を過不足なく収集し、論文が先行研究を踏まえている。文章に矛盾・飛躍・不足がなく、結論を論理的に導き出している。	先行研究を過不足なく収集し、論文が先行研究を踏まえている。しかし文章の論理的展開に少し無理や不足がある。	文献の収集、批判的検討のどちらかが不十分である。しかし文章の論理的展開に少し無理や不足がある。	文献の収集、批判的検討のどちらも不十分である。文章の論理的展開に少し無理や不足がある。	文献の収集、批判的検討のどちらも不十分である。文章の論理的展開に無理がある。
5	問題解決力と独創性	1. 解決可能な問題を設定し、問題を解決するための、分析方法などが妥当である。 2. 様々な手法で得られた根拠を基に、問題に対する回答を示している。 3. 発想や視点に独創性が認められる。	3 つのうち、2 つはほぼ出来ている。	3 つのうち、1 つはほぼ出来ている。	3 つともあまり出来ていない。	3 つとも出来ていない。
6	論文表現	1. わかりやすい文章で書かれている。 2. 文法、表現や形式に誤りがない。 3. 図表の用い方が適切である。	3 つのうち、2 つはほぼ出来ている。	3 つのうち、1 つはほぼ出来ている。	3 つともあまり出来ていない。	3 つとも出来ていない。
7	プレゼンテーション	効果的なプレゼンテーション技法を使用し、研究内容をわかりやすく説明している。質問や意見にも明確に回答している。	プレゼンテーション技法は標準的だが、研究内容をわかりやすく説明している。質問や意見にも明確に回答している。	研究内容の説明が少しわかりにくい。しかし質問や意見には明確に回答している。	研究内容の説明が少しわかりにくい。質問や意見に明確に答えられていない。	研究内容の説明がわかりにくく、質問や意見に答えられなかった。

評価の対象となった卒業研究論文数は、表 2 の通り国際学群が 290 編、スポーツ健康学科が 90 編、看護学科が 89 編であった。

表 2 評価の対象となった卒業研究論文数

国際学群	290
スポーツ健康学科	90
看護学科	89
<b>総計</b>	<b>469</b>

結果：

**全学の評価結果** 全学共通のルーブリック7項目について、S、A、B、C、Dの5段階評価の分布の割合を集計した結果、表3と図1の通りとなった。また、ルーブリック7項目を得点化し、順位相関係数を算出した結果は、表4の通りとなった。

表 3 全学の卒業研究論文ルーブリック評価の結果（割合）

全学	ルーブリック評価					総計
	S	A	B	C	D	
卒業研究に取り組む態度	43.3%	30.5%	17.9%	7.9%	0.4%	100.0%
構成	38.4%	45.0%	13.2%	3.0%	0.4%	100.0%
引用	42.2%	39.0%	15.6%	3.0%	0.2%	100.0%
批判的・論理的思考	22.0%	46.5%	24.1%	7.0%	0.4%	100.0%
問題解決力と独創性	29.6%	43.5%	19.8%	6.6%	0.4%	100.0%
論文表現	41.4%	40.9%	12.2%	5.1%	0.4%	100.0%
プレゼンテーション	43.5%	40.0%	12.3%	3.7%	0.4%	100.0%

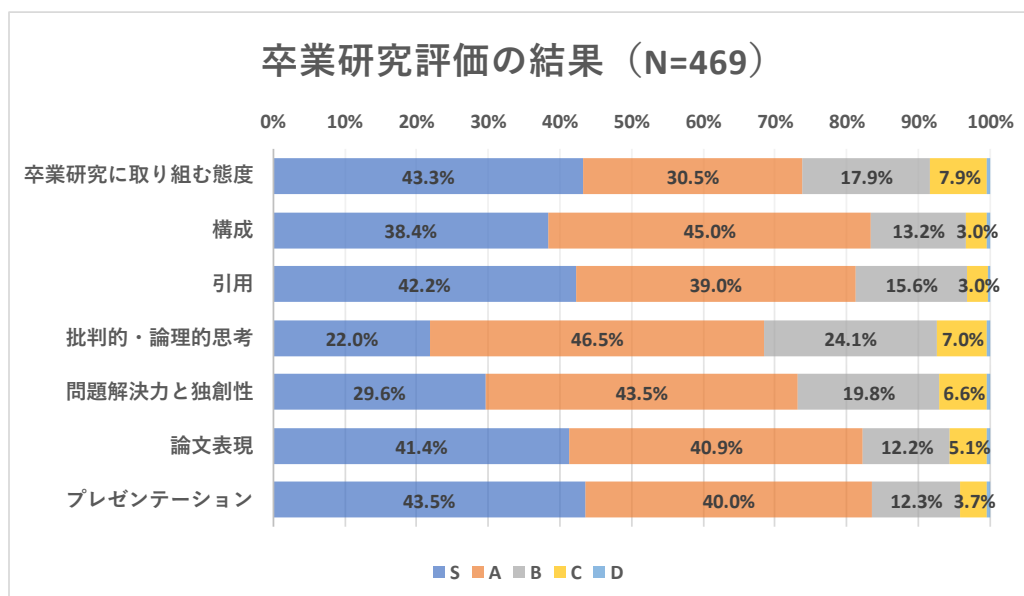


図 1 卒業研究評価の結果（総計）

表 4 ルーブリック項目間の順位相関係数

順位相関係数(スピアマン)	①	②	③	④	⑤	⑥
①卒業研究に取り組む態度						
②構成	.546**					
③引用	.500**	.594**				
④批判的・論理的思考	.565**	.588**	.634**			
⑤問題解決力と独創性	.550**	.591**	.574**	.717**		
⑥論文表現	.500**	.628**	.598**	.604**	.619**	
⑦プレゼンテーション	.467**	.543**	.436**	.518**	.465**	.510**

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

**全学共通の評価結果に対する考察** 図 1 の通り、S 評価・A 評価の合計が 80%以上得られた評価項目は、「構成」、「引用」、「論文表現」、「プレゼンテーション」の 4 項目であり、すべて論文執筆の“型（基本）”や発表技法に関する評価項目であった。一方で、S 評価・A 評価の合計が 80%未満であった項目は、「卒業研究に取り組む態度」、「批判的・論理的思考」、「問題解決力と独創性」の 3 項目であり、学生の態度と研究の質に関する評価項目であった。また、表 4 の通り、ルーブリック 7 項目は独立した評価として設定されているものの、すべての項目間で正の相関が認められ、1%水準で有意となった。つまり、特定の項目で高い評価を得た卒業研究は、その他の項目でも高い評価を得ていることが分かり、7 項目は一つの卒業研究評価の尺度としての信頼性はあると考えてよい。なお、最も高い相関係数を示したペアは、「批判的・論理思考」と「問題解決力と独創性」の間で.717 であり、逆に最も低い相関係数は、「引用」と「プレゼンテーション」の.436 であった。

「卒業研究に取り組む態度」については、他の項目よりも S 評価が 43.3%と多く、逆に A 評価が 30.5%と少ないことが特徴的であり、個々の学生に対する評価の間にバラツキが大きいことが分かる。

また、研究の質を表す「批判的・論理的思考」と「問題解決力と独創性」は、S 評価がそれぞれ 22.0%と 29.6%と少なく、A 評価がそれぞれ 46.5%、43.5%と多いことが特徴的であった。この 2 つの指標は、研究の質を評価した項目であることから、「構成」「引用」などの論文の型を評価する項目と比べ、指導教員の評価が厳しくなりやすい項目であることが理由として考えられる。

しかしながら、1 年次必修の「教養演習 I」「教養演習 II」では「批判的・論理的思考」と「問題解決力」の重要性、そして受動的学習から主体的学習への必要性を教授していることに象徴されるように、入学から卒業までの 4 年間のリベラルアーツ教育と専門教育の有機的連携が本学の教育カリキュラムの特徴であるという点を踏まえると、2020 年度の卒業論文研究指導のあり方、将来の教育カリキュラムや各授業における「批判的・論理的思考」「問題解決力」の育成についての改善策を検討する必要があるといえる。

**所属別の評価結果に対する分析** 各学群・学科別の評価結果を図 2～図 8 に掲載した。全体的に、国際学群とスポーツ健康学科の卒業研究に比べ、看護学科の卒業研究において優れた評価が多く認められた。その傾向から、国際学群とスポーツ健康学科が、看護学科の卒業研究指導に至る教育カリキュラムや指導体制に学ぶ点は大きいと考えられる。しかしながら、所属別の評価に違いが認められる原因としては、教育カリキュラムや指導体制だけでなく、扱う研究の領域、教員一人当たりの指導人数、卒業研究に求める水準などの違いも反映していると考え、詳細な分析については引き続き検討を行う必要がある。

本報告では、5%の有意水準を設定した残差分析（全学の総計に比べて差があるか否か）を行い、統計的有意差がみられた所属別の結果について記述することにとどめる。

**卒業研究に取り組む態度** 全学の割合に比べて、スポーツ健康学科は S 評価が少なく（30.0%）、C 評価が多かった（16.7%）。看護学科は C 評価が少なかった（2.3%）。

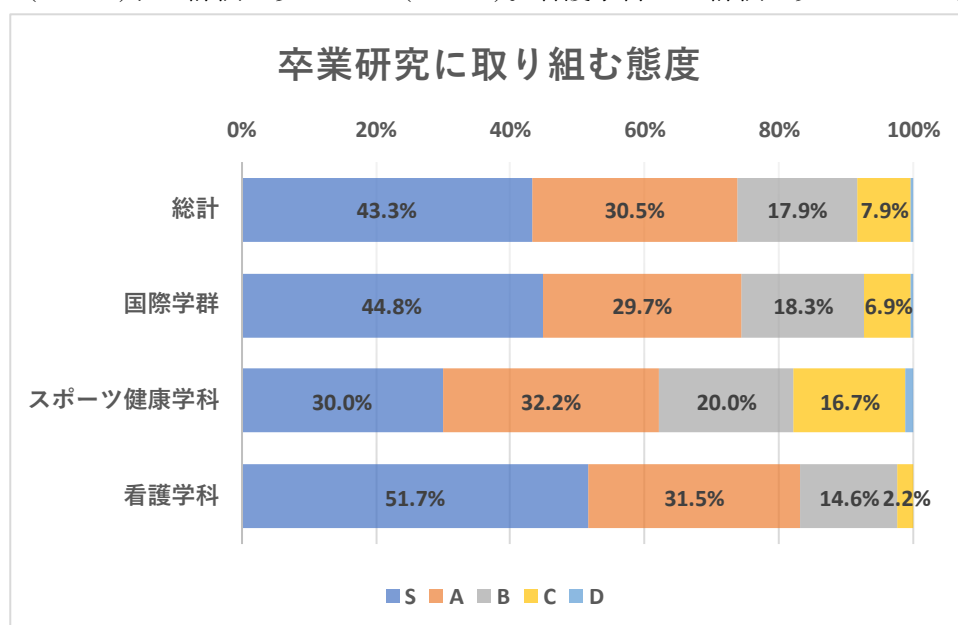


図 2 卒業研究に取り組む態度 (所属別)

**構成** 全学の割合に比べて、国際学群はS評価（34.5%）とC評価（1.7%）が少なかった。スポーツ健康学科はS評価が少なく（26.7%）、C評価が多かった（8.9%）。看護学科はS評価が多く（62.9%）、A評価（30.3%）とB評価（5.6%）が少なかった。

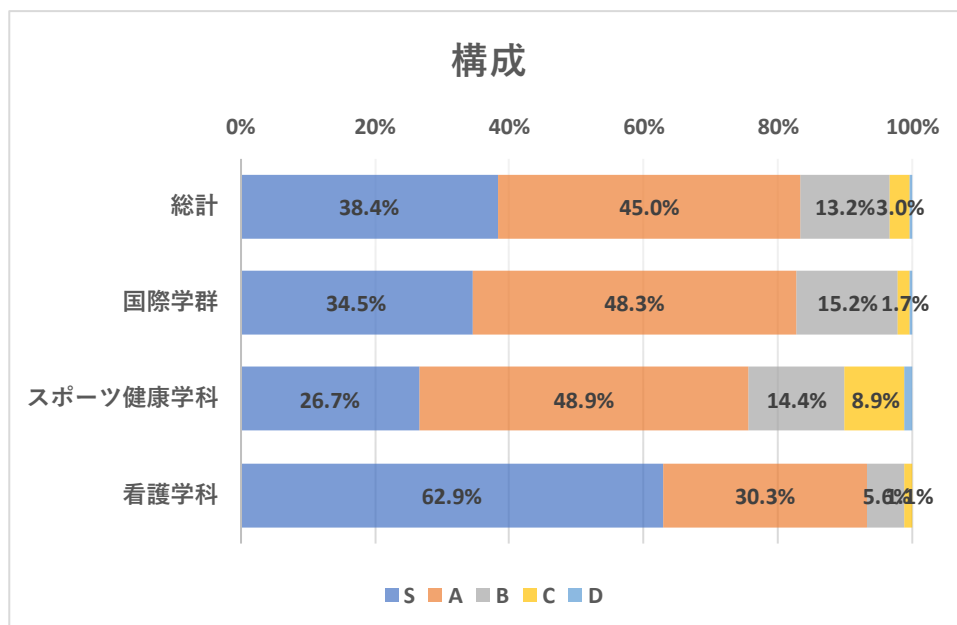


図 3 構成 (所属別)

**引用** 全学の割合に比べて、スポーツ健康学科はC評価が多かった（8.9%）。看護学科はS評価が多く（59.6%）、B評価（5.6%）が少なかった。

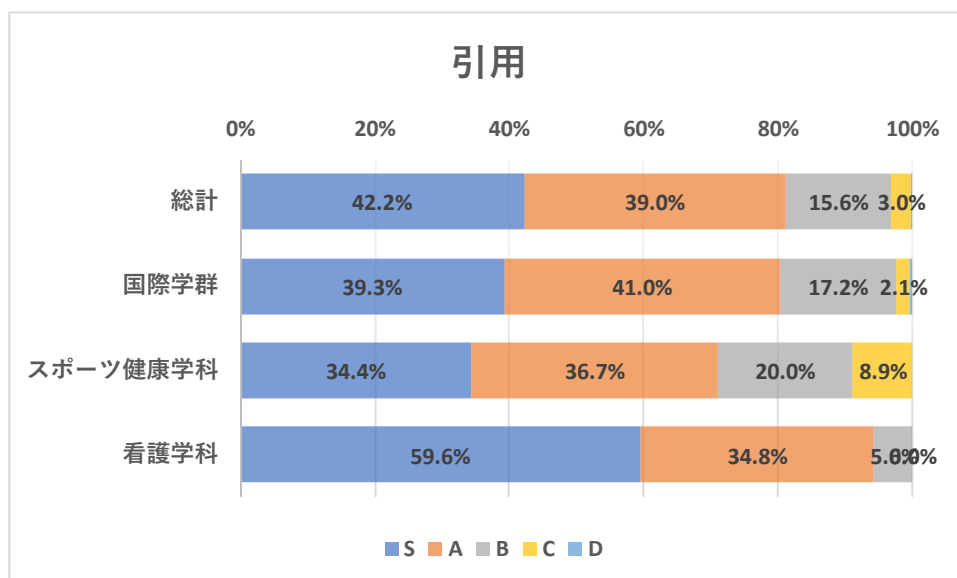


図 4 引用 (所属別)

**批判的・論理的思考** 全学の割合に比べて、国際学群は C 評価が少なかった (5.2%)。スポーツ健康学科は S 評価 (8.9%)、A 評価 (30.0%) が少なく、B 評価 (41.1%)、C 評価 (20.0%) が多かった。看護学科は A 評価が多く (60.7%)、B 評価 (8.9%) と C 評価 (0.0%) が少なかった。

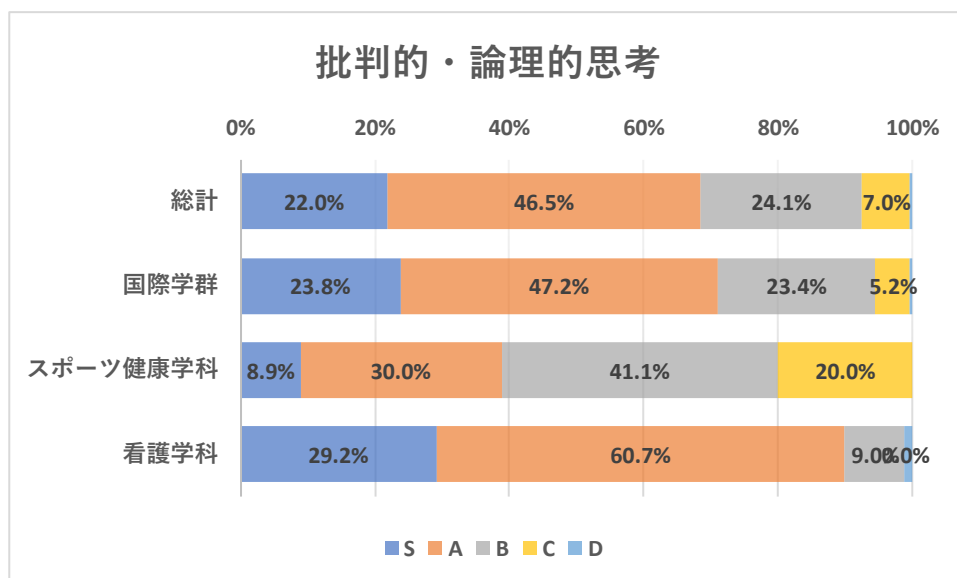


図 5 批判的・論理的思考 (所属別)

**問題解決力と独創性** 全学の割合に比べて、国際学群は S 評価が多く (33.1%)、C 評価が少なかった (4.5%)。スポーツ健康学科は S 評価が少なく (4.4%)、B 評価 (35.6%) と C 評価 (18.9%) が多かった。看護学科は S 評価が多く (43.8%)、B 評価 (7.9%) と C 評価 (1.1%) が少なかった。

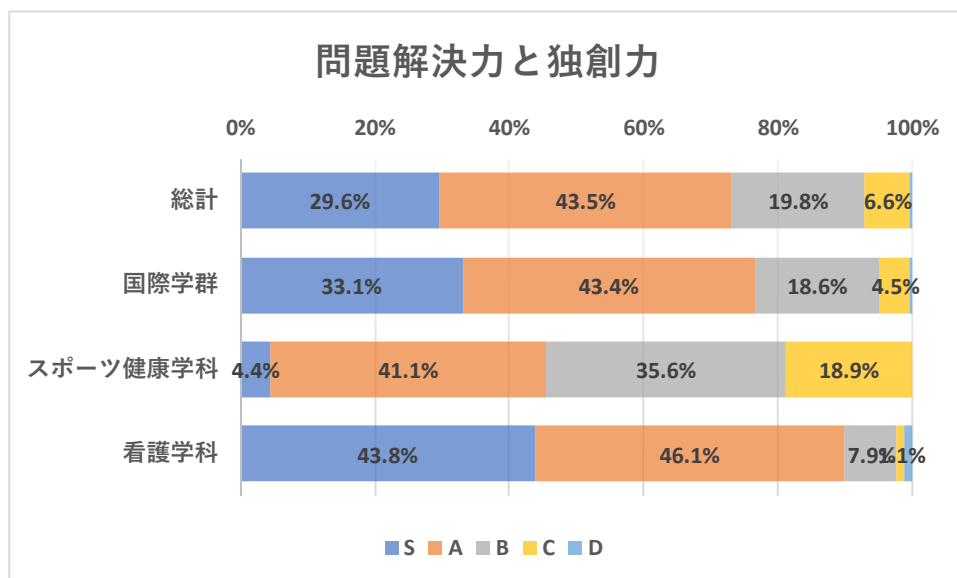


図 6 問題解決力と独創性 (所属別)

**論文表現** 全学の割合に比べて、スポーツ健康学科は S 評価が少なく（21.1%）、B 評価（23.3%）と C 評価（11.1%）が多かった。看護学科は S 評価が多く（52.8%）、B 評価が少なかった（5.6%）。

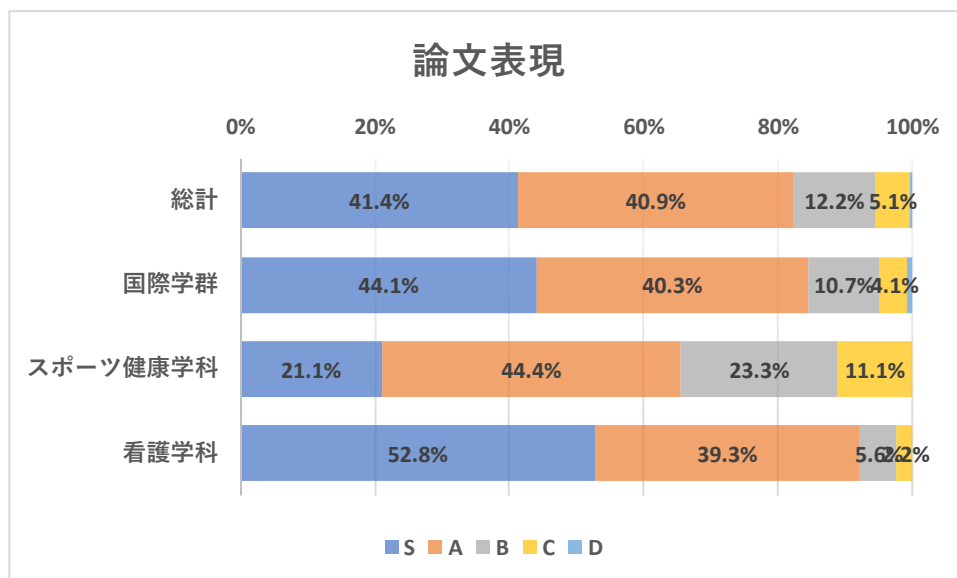


図 7 論文表現 (所属別)

**プレゼンテーション** 全学の割合に比べて、国際学群は A 評価が多く（49.5%）、S 評価（36.3%）と B 評価（9.3%）が少なかった。スポーツ健康学科は S 評価（32.5%）と A 評価（26.0%）が少なく、B 評価が多かった（35.1%）。看護学科は S 評価が多く（76.4%）、A 評価（21.4%）、B 評価（2.25%）、C 評価（0.0%）が少なかった。

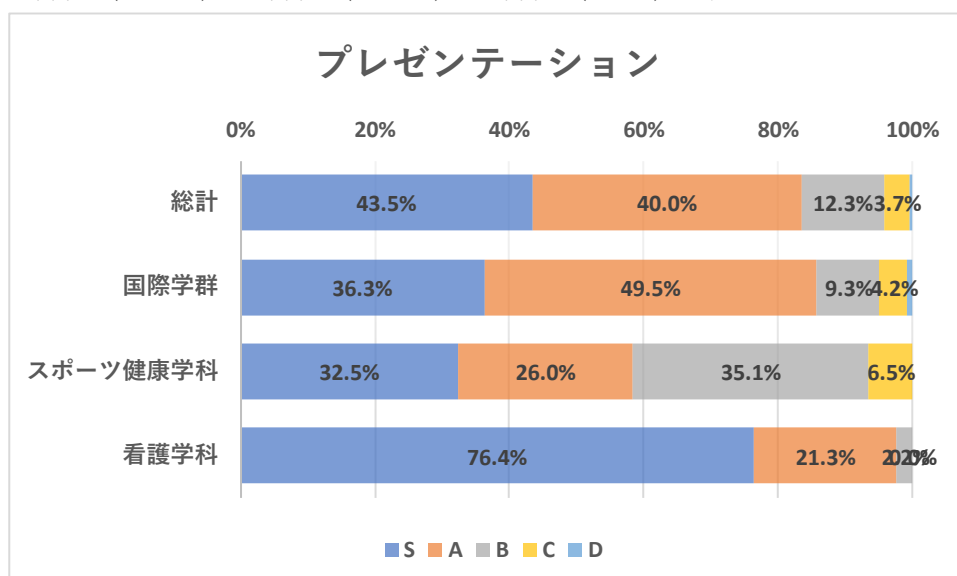


図 8 プレゼンテーション (所属別)

まとめ：

全学共通のルーブリック評価項目に基づき、2019年度に提出された卒業研究の分析を行った結果、4年間の学士課程教育における学習成果の把握ができた。具体的には、論文の“型”や発表技法については相対的に高い評価が得られたが、学生の学習態度にはバラツキが認められ、批判的・論理的思考や問題解決力と独創性の点では他の項目よりも課題が多いことが明らかになった。

具体的な改善策については、全学的な議論が必要ではあるが、1年次必修科目である「教養演習Ⅰ」「教養演習Ⅱ」における「批判的・論理的思考」「問題解決力」を養う方法を強化するだけでなく、1年次以降の必修科目（例、演習、実習、論文精読、研究技法に関する授業）において、入学から卒業まで段階的に卒業研究を執筆するために必要な能力を絶えず養い続ける教育カリキュラムの改革が求められる。特に、卒業研究論文の指導における教員と学生との対話や相互作用を活性化するためにも、日常的な研究指導の場を増やすことはもちろん、テーマ発表会、中間発表会、最終発表会等の行事を計画的に実施し、それぞれの発表会の段階において学生に求める学習成果の目標（達成基準）を明確にすることが必要となるであろう。

全学共通のルーブリックはそのような意味で、各発表会においての教員と学生の理解度を一致させる良いツールといえる。各研究領域によっては使いにくい項目や不足項目もあるため、全学的かつ学士課程別に毎年バージョンアップをしていく努力も必要となってくるであろう。

また、今回の卒業研究評価は指導教員一人によって行われたものであり、その評価データの信頼性や妥当性を担保するには、複数教員（2人以上）での評価が望ましいと言えるが、研究指導の過程の中で評価を繰り返し行う負担の増加も考慮しながら、ルーブリック評価の実施体制や方法も検討していくべきであろう。

2020年度に向けては、教養教育を統括するリベラルアーツ機構、学群・学科において評価結果の分析を進め、すぐにでも実行可能な改善策について取り組みを促していきたい。